
色彩

海王星

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

色彩

【Nコード】

N2258Y

【作者名】

海王星

【あらすじ】

22世紀の日本で発見された『色箱^{しきそう}』：それは全部で465種類あり、それぞれが違う色、違う能力を持つ。これはそんな『色箱』を扱う少年の物語…

色彩 1色

「いてっ！」

これで人にぶつかつた回数は38回目…100m先の店からここま
で来る間にだ。…自己紹介が遅れたな、俺の名前は色神銀^{しきがみぎん}。周りか
らは銀と呼ばれている。

「…おかしいな、この辺りのはずなんだけど…さっき手に入れたば
つかりなにのな…」

俺は先ほどの辺りで落とした赤の眷属^{けんぞく}『浅蘇芳^{アサスオウ}』を探している。

「おっ、あつたあつた…」

慌てて俺は色箱^{しきごうつ}に手を伸ばす。だが俺の手は『浅蘇芳^{アサスオウ}』を掴めなか
った。

「お？何だこの箱…」

突如現れた男が『浅蘇芳^{アサスオウ}』を拾い上げる。

「…すいません、それ俺のなんで返してもらえます？」

俺は丁寧^{しんよう}にそう言つて、色箱^{しきごうつ}の返却を求めた。

「…あ？何だガキ？」

男はそう言つて俺を睨む。おいおい…そんだけで怒んなよ。

「はあ…誰がガキだと…？」

男の後ろに回りこみ、首に小刀を突きつける。一瞬の出来事に、男
は反応できない。男は力なくその場に膝を付いた。俺はその男の手
から『浅蘇芳^{アサスオウ}』を取り上げて、携帯を開いた。アイツの事だ、どう
せ今頃賞金首を狩っているだろう。

「…やっぱりねえ…」

携帯の画面には…

『6丁目の廃工場第2倉庫で待つてろ。10時には来る』

…主語が無くてもわかる。

「…しょうがないか」

後で文句言つてやる。俺はため息をついて、その場を後にした。

「色神銀か…面白そうだね」
建物の影から紅い双眼が覗き、俺の姿を捉えていた。

「…相変わらず臭い…」

赤髪の青年は、真っ赤な液体の滴る袋を担ぎ、近くにあつた廃墟に入っていく。彼の手は袋を掴んでいた所為か、真っ赤に染まっていた。

「…いるんだろジーク」

赤髪の青年は暗闇に向かって話しかけた。それと同時に、闇の中から足音が聞こえる。

「また狩って来たのかい？相変わらず君はすごい…」

闇の中から出て来たのは、色白で黒髪の青年だった。恐らく赤髪の青年と同じくらいの年齢だろう。

「こんな汚い仕事を平気でやれるなんて」

「いいから早く換金してくれ。臭いから」

赤髪の青年は目を細めながら鼻をつまむ。

「分かったよ洸雅」

ジークは面倒くさそうに袋を摘む。

「また首だけかい？いい加減切り落とすのやめてくれよ。本当君はどうかしてる」

ジークは頭をかいた。

「体も一緒だと重たいだろ？」

洸雅と呼ばれた赤髪の青年は、そんな事を言いながら携帯でゲームをする。

「…」

ジークはそんな彼を横目で見てため息をつく、首を持って暗闇に消えた。

「ため息つくと幸せ逃げるらしいが…」

「誰のせいだ！」

暗闇の奥からジークの怒鳴り声が聞こえる。

「あまり腹を立てると、血圧上がるぞ」

洸雅の口からそんな言葉が飛ぶが、ジークの顔色は全く変わらない。暗闇の向こうからは、物音一つしない。「早くしてくれ…俺も仕事がある」

すると、闇から何か飛んでくる。

「早くしてやったよ？」

洸雅に向かって飛んで来たのは、中に現金の詰まったアタッシユケースだった。洸雅はそれを掴むと、後ろを向いて歩き出す。

「また首を獲ったら来る、次は投げるなよ？」

くるりと首だけを回してジークを見据える。

「どうせ来るんなら君じゃなくて銀が来てくれると嬉しいんだk」

ジークの言葉は、向かって来た大剣によって遮られた。大剣を振ったのは、洸雅…

「…ケンカなら買うが？」

それだけ言って、大剣を鞘に収める。

「おうおう、戦闘民族せんとうみんぞくってのは怖いねえ」

わざとらしく言うジーク。洸雅の肩が僅かに動く。だがその直後、何もなかったように闇に消えて行った。

「…はあ」

待ち合わせ場所に着いた途端、ため息を吐く。裏世界の俺は『何でも屋』を相棒と共に営んでいる。情報提供や殺しの依頼から、子守やおつかいなどの依頼まで…今日もそんな依頼を請けに来た所だ。

「…もしもし、こちら『何でも屋』です」

俺は依頼主の番号に電話をかける。

「はい、こちら鈴木です」

依頼主の男が電話に出る。声からして20代半ばだろう。

「探して欲しいと言われていた物についてですが…詳細をお教え下

さい」

うお、自分でも驚くほどの敬語だ。

「ああその話か」

それ以外に何があるってんだよ。口から漏れそうになる言葉を必死に飲み込む。

「大昔、中国の地に降り立った朱雀すざくの羽です」「…朱雀…？」

朱雀すざくなんているのか？俺は半信半疑で、今の説明をメモにとる。

「その羽を持つだけで、不老長寿ふろうちようじゅが手に入るといふ伝説があります」
わお、任務じゃなかったら絶対的に欲しいね、ソレ。

「了解しました、すぐに探してきます」

俺はそれだけ言って、携帯の通話を切る。はつきり言つと物搜しの仕事は面倒だ。

「…俺『黄の眷属色』けんぞくしよく 持ってないしな…」

ふと腕のデジタル時計に目を落とす。表示は9：58…後2分が。

「どこかで死んでたらいいな♪いいな♪いいのにな♪」

爽快なリズムに乗せて、そんな事を呟く。

「なるべく陰湿な所で♪驚くほどの奇病で♪」

あ、何か楽しくなってきた。

「そのゴミのような遺伝子を♪未来に残さないで♪」

「誰がゴミだ」

不意に後ろから声がする。腕時計を確かめると、10：00ジャストだった。

「何でもないよ洸雅♪」「…『櫥色』ハジイロ…抜と「ごめんなさい」フン

…」

畜生、この俺に頭を下げさせるとはいい度胸だ。

「で、依頼内容は」

何もなかったような顔で、洸雅が俺に尋ねる。少し腹が立つ。

「中国の『朱雀すざくの羽』って代物を持ち帰ってくるだけだとさ」

俺の言葉に反応したのか、洸雅の眉が少し引き攣る。…そう言えば

洸雅は戦鬪民族『朱雀族』せんとうみんぞく すざくぞくの末裔だったな。てか早く滅んでくれ、

そんな民族。

「で、飛行機にする？徒歩にする？俺に頼る？」

その途端、横から恐ろしいほどの殺気が。スリル満点だよコレ。

「お前に頼る事だけは避けておく」

さり気に失礼な事言いやがったよコイツ。

「どうすんの？洸雅『白の眷属色』^{けんぞくしよく}持っていないじゃん」

あ、何か落ち込んだじゃったよ。可愛いなオイ。

「銀、お前はどやって行くんだ？」

腐れ朱雀^{すざく}が、俺をチラ見しながら聞いてくる。普通にこっち向けよ。

「俺は…『卯の花』^{ウハナ}で行くね」「よし、寄越せ」

…そう言われてハイって言う奴いないと思うよ？

「何で？」「中国に行くから」

いや、これないと俺も行けないんですけど。

「仕事先は中国なんだろ？」

そんな事は分かりきってんだよ。俺は腰から青みがかった『色箱』^{しきやう}を出し、開箱した。卯の花^{ウハナ}色の髪の少年が現れる。

「俺はよこせと言ったはずだが？」

知るか。卯の花^{ウハナ}が空気に手を翳すと、2体の大鷲が現れた。俺はその大鷲の背に飛び乗る。

「これで中国までひとつ飛びだぜ？」

すると、洸雅も洪々大鷲の背に飛び乗った。

「結局俺を頼るかたちになったな」

その途端、俺の屈めた上を銃弾が掠める。横を見ると、銃口から煙を出している二丁拳銃を持った洸雅がいた。確信犯だねコイツ。

「うわーんパー、洸雅たんが虐めてくるうー」

また銃弾が飛んでくる。俺は屈んでかわす。

「…死にたいのか？」

洸雅がそう言うと、二丁拳銃が泡のように弾けて消えた。

「すみませんでした」

畜生、また俺に頭を下げさせやがって。

「あの赤髪…間違いない、『朱雀族』の末裔か…」

凍て付くような蒼い瞳が、空を舞う俺と洸雅の姿を捉えていた。

「…徹底的に潰す」

無表情な青年の右目を跨ぐ、青い炎の刺青が不気味に燃え上がる。
彼の双眸には憤怒の炎が灯っていた。

「…銀」「何？」「…いや、何でもない」

洸雅が一瞬不審そうな表情をするが、すぐに元の無表情な顔に戻る。

「…追手か？」「…違う」

洸雅の翠の瞳が、俺の背後を見つめていた。俺もつられて後ろを振り返る。

「…何もないじゃん、やっぱ洸雅の頭は空っぽなんだね」「頭の中に何もない真空が広がっている銀に言われたくない」「洸雅こそ、その空っぽの頭に鳥でも飼ったら？」

あーあ、またいつものように口喧嘩が始まる。

「銀こそ、その宇宙空間の頭内に星を生み出して有効活用すればいいだろう？」「んー、洸雅と言う名前の粗大ゴミは何曜日に捨てるのかな？」

俺がそう言つと、また頭の上を銃弾が掠める。洸雅の手にはマシンガンが。

「チツ…」

うわぁ…相棒にマシンガンぶっ放した上に、舌打ちまでしたよこの人。洸雅の手に握られていたマシンガンが弾けて消える。

「次は殺すだけでは済まない」

洸雅はポケットから携帯を出し、ゲームをし始める。俺もポケットから携帯を取り出す。いつものように、インターネットでよく行くサイトにアクセスする。

「おお！みんな揃ってるじゃん！」

俺がふとそう言つと、洸雅がこちらを見た。

「…みんな？俺とお前以外誰がいる」

洸雅は俺の一言を真に受けているらしい。違えよ、俺が言ってるのは『裏世界（ネット上）』の事だよ。

「何でちゅか？洸雅たんには話してないでちゅよ？」「…」

おぞましいほどの殺気を放つ洸雅。本当に気が短いなあ洸雅たんは。まだ中国に着くには5時間以上かかる。最近の携帯は電池持続時間が長くなって、満タンなら1週間は持つ。科学って凄いね。

「さて、チャットに入ろつと」

ここには洸雅も来ない。俺の憩いの場だ。

チャットルーム

— Agさんが入室しました—

Ag) 【こんちわー】

ネイビー) 【久しぶりだね〜】

日洋) 【いやいや、昨日もチャットで話したよね？】

Ag) 【まあいいではないか。いつものように笑いあり、泣きありだよ日洋殿】

日洋) 【Σ時代劇！？】

— 奏さんが入室しました—

ネイビー) 【あつ！奏さんだ！ヤッホー！】

奏) 【こんにちは】

Ag) 【相変わらずテンション高いねネイビーさん・元気でなにより】

日洋（「…ただの馬鹿だと思うけど？」）

ネイビー（「Σちよっ！酷っ！僕これでも博士号持ってるよ！？」）

奏（「凄いですね。私色使士^{いろつかい}なんで、勉強する暇ないんですよ。」）

ネイビー（「…僕も一応色使士^{いろつかい}です。」）

日洋（「うっそ！？マジで?!」）

A g（「リアルじゃ超真面目だったたりしてww」）

奏（「…もしかして、皆さんも色使士^{いろつかい}ですか？」）

日洋（「ご名答」）

A g（「うん、まあね」）

ネイビー（「見たか日洋！僕は馬鹿じゃない！むしろ天才だ！」）

A g（「それを自分で言うのもどうかと思うけど…」）

奏（「あっ、私これから仕事なんで、これで失礼します。」）

日洋（「Σヤバッ！もうこんな時間だ！」）

—奏さんが退室しました—

—日洋さんが退室しました—

A g（「仕事頑張って下さいね」）

ネイビー（「そう言えばA gさんは仕事ないんですか？」）

A g（「今仕事で中国に向かってまーす」）

ネイビー（「へえー、何の仕事で？」）

A g（「『朱雀^{すざく}の羽』ってのを探しに行くんです」）

ネイビー（「…朱雀^{すざく}の羽、かあ…じゃあ1つ言っておくよ」）

ネイビー（「もし見つけたら、絶対に素手で触っちゃダメ」）

ネイビー（「皮膚を焼かれるから、熱に強い手袋をした方がいいよ」）

色彩 2色

暗い路地の中に2人はいた。1人は紺色の髪で、右頬に青い燐光の刺青をした長身の青年。もう1人は金髪で、手に大量の札を貼り付けた少年だ。青年が口を開く。

「さて、追跡は地中、地上、空中のどれがいい？」

手には水色の色箱しきゆうが握られていた。

「選べと言われたら空だね」

札を貼られた両腕からは、常に紅いオーラのような物が滲み出ている。

「そもそも君の実力からすれば、ここから遠距離で攻撃できるでしょ？」

金髪の少年の言葉に、青年は目を細める。

「普通に殺してしまつては意味がない。苦痛を与えて絶望を与え、精神を崩壊させて殺す」

青年は無表情でそう言う。だがその双眸には、恨みと殺意の炎が宿っていた。

「あー、でも目玉だけは頂戴ごうだいよ？宝珠ほうしゆ作りに使うから」

金髪の少年の周囲に、無数の宝珠ほうしゆが浮遊する。

「…ノツカ、まだ宝珠ほうしゆ作りをやめていなかったのか？」

ノツカと呼ばれた金髪の少年は、クスツと笑う。

「1万個作るのが僕の目標だからね。それには5000人分の目玉が要る」

青年は思った。自分が寝ている間に目が抜き取られるのではないだろうかと。

「…聞きたくはないが、現時点で宝珠ほうしゆはいくつ作ったんだ？」

「んー、ざつと400。正確には396個」

青年の問いに、清々しい顔で答えるノツカ。

「あと9604個♪あと4802人♪」

「…珠使士^{たまつかい}の考える事は相変わらず理解できない」

そう呟く青年の周りを、ノツカは無邪気に跳ね回っている。

「蒼もそんな事言ってるけどさあ、内臓コレクションしてんじゃん」
ノツカがピタリと走るのをやめる。蒼と呼ばれた青年は苦い表情を浮かべる。

「あ、でも動かなくなったり、病気になったりしてるのは集めないんだよね」

ノツカの感情を表すかのように、396個の宝珠^{ほうしゆ}が周囲を旋回する。まるで惑星の周りを回る衛星…いや、恒星の周りを回る惑星のように…

「中国到達！我很高興！」

俺は大鷲の背から飛び降り、中国の大地を踏みしめる。現在の時刻はPM3:30。出発してから5時間30分経っていた。

「中国語で挨拶など必要ない。日本語は世界の共通語だろうが。早く依頼の品を探しに行くぞ」

俺の相棒（仮）は、大鷲の背で優雅に寛^{くつろ}いでいた。そう言うお前は寛^{くつろ}いでるのかよ。

「ああそうだな、洸雅もちゃんとして来なよ？」

俺が指を鳴らすと、乗ってきた2頭の大鷲が泡のように弾けて消える。凭^{もた}れかかっていた洸雅はバランスを崩し、大地に叩き付けられる。

「…だってさあ、探しに行こうって言い出したの洸雅じゃん？」

反射的に左に避けた俺のすぐ右側を、銃弾が掠めて飛んでいく。相棒（仮）の洸雅の手元を見ると、鈍く光る二丁拳銃が握られていた。

「死ね、いや殺す」

「言い換えたつものりようだけど、要点は大して変わってないよね？結局俺死ぬじゃん」

「だから死ね」

再び飛んで来た銃弾を、頭を後ろに反らして避ける。俺を捕らえられず後ろのコンクリ壁に着弾した弾は、凄まじい勢いで壁を溶解していく。

「このっ！ 焰弾えんだん使いやがって！ 殺す気か！」

「何故避ける」

「避けるのが普通だろ！ 聞いてんのかオイッ！」

洸雅は耳を塞ぎ、俺の話などまるで聞いていない。両手に握られていた二丁拳銃はいつの間にか消えていた。

「やはり俺が銀などのために手を汚す必要はない。勝手にのたれ死ぬのを待とう」

お願いしまーす、誰か今すぐコイツを処刑して下さい。なるべく悲惨な殺し方でー。

「洸雅：俺はお前が嫌いだ」

「安心しろ、俺も銀が嫌いだ」

洸雅の肩に、全身が焰ほのおの鳥がとまる。

「お前を燃やすと、灰の代わりに酸化銀さんかぎんが残りそうだな」

俺は銀で出来てんのか？ だったらある意味すげえよ。

「ここで暇を潰しても仕方ない。近隣住民きんりんにでも話を聞きに行く、付いて来い」

洸雅はそう言うのと焰ほのおの鳥を消し、人気のある方へ歩き出す。コイツの言う事を聞くのはあまりいい気分ではなかったが、一応付いて行つてやるう。

「言い方が間違つてたよ洸雅。どうぞ付いて来て下さいませ、だろ？」

洸雅の顔に苦い表情が生まれた。

「うああああ！ また負けたあ！」

「…行動パターンが直線的すぎる」

2人は旅客機りょかくきの中でゲームをしていた。最近は技術が発達し、病院

や旅客機^{りょかくき}などでも赤外線通信が使える。

「だって僕初心者だもん…手加減してよう…」

ノツカは頬を膨らませる。

「命と命の取り合いの中で、手加減などという言葉は存在しない。よって手加減はしない」

ノツカがウル目を使うが、蒼はあっさりと言い捨てた。

「色神銀は甘くない、かつて白虎族^{びゃうこ}の『栢^{かや}』をも倒したほどの実力者だ」

蒼の青い目が細くなる。彼も銀達に興味があるのだ。

「白^{しろ}使いの栢^{かや}…やられてたんだね」

ノツカの周囲の白い宝珠^{ほうじゆ}が跳ね回る。

「『純色^{じゅんしよく}』を持つ相手を倒してるなんて…更に興味が出て来た…♪」
ノツカは喜^き悦^{えつ}の笑みを浮かべる。周囲を回っていた宝珠^{ほうじゆ}が消えたのと同時に、両手から溢れる紅い光が増した。

「…南雲^{なぐも}洸雅^{こうが}には手を出すな。アイツは一族の敵^{かたき}…誰にも渡さない」
蒼の目に憎悪と殺意の炎が灯る。

中国のよく分からん村…そこに俺と洸雅はいた。

「あ、づい！何でわざわざ砂漠通るの!？」

「暑い^{あつ}いか？俺にはこれが丁度いい」

あのー、今何度だと思ってるんですか？携帯にはどう見ても43度
って表示されてますが…？

銀）「…『紅碧^{こうへき}』装備^{そうび}」

水色^{みづいろ}がかった色箱^{かいろ}を取り出し、開箱^{かいそう}する。現れた紅碧^{こうへき}の髪^{かみ}の少年は、俺を包むように気化した。『水の眷属色^{けんぞくしよく}』の特性『低温^{ていおん}』を活かし、自分の周囲の温度を下げる。

ああ、さっきよりは涼しくて快適だ。ふと横を見ると、洸雅は全く汗を掻^かいていない。朱雀族^{すざく}は高温に強い皮膚を持っていると言われるが、本当だったようだ。

「…何をジロジロ見ている。俺ではなく前を見る」

「や、相変わらず馬鹿面してんなーと思って見てただけ」

洗雅から凄まじい怒気（いかでか）が放たれる。無視だ無視。

「…そう言うお前はアホ面だな」

「知ってる？アホって漢字で書くと『阿呆』（あほう）になるんだよ？漢字で書けないなんて、やっぱり馬鹿だね」

破碎音（はさいおん）。俺（が）が屈んで避けた頭上を銃弾が掠め、後ろにあった岩を破壊する。

「何でも武力で解決しようとするんだ、わーいバーカ」

嵐のように飛んで来る銃弾をかわしながら、俺は近隣（きんりん）の村へと進む。危なっ、今足掠めたよ。

「…チビですばしつこい分、銃撃は当てづらいな」

洗雅のそんな呟きと共に、持っていた銃が泡のように弾けて消える。

「次は『薄青』（ウスアヲ）ではなく、『櫛色』（ハジイロ）の太刀を叩き込んでやる」

「言葉の意味がよく分からないけど、とりあえず洗雅が死ぬべきだつて事は分かった」

俺がそう返すと、洗雅は苦い表情を浮かべた。

「…村が見えてきたぞ」

砂漠の中に、うつすらと小さな集落が見えてくる。

「…思ったけどさあ、わざわざ聞きに行かなくても良いと思うんだけど」

洗雅の目に疑問の色が浮かぶ。

「『黄の眷属色』（けんぞくしよく）使って探知すればすぐ見つかるじゃん」

『黄の眷属色』（けんぞくしよく）の特性は『感知』：敵の攻撃や相手の居場所などを探知できる。それを『朱雀の羽』（すざく）の搜索に応用しようという事だ。

「何を言うかと思えばそんな事か」

何！？そんな事とはどう言う意味だ！と言いそうになったがやめる。
「無理だ」

「はあ！？何で使えないんだよ！」

「『黄の眷属色』^{けんぞくしよく}」とも言ども、感知できるのは生命反応と色箱^{しきそう}だけだ。生き物でも色箱^{しきそう}でもない羽は無理だな」

洸雅は俺を見て嗤^{わら}う。畜生、俺を馬鹿にしゃがって。

「全然使えないね、暑さには強いくせに」

俺は皮肉を込めて言ってる。反射的に右に避けた俺の左側の空間を、洸雅の大刀^{だいたう}が切り裂く。

「避ける事はないだろう？安心して死ね」

地面に刺さった大刀^{だいたう}を振り抜き、俺に襲い掛かる洸雅。俺の屈^{かが}んだ頭上^{やいば}を刃^なが薙^なぐ。

「『櫛色』^{ハジイロ}：『双剣』^{そうけん}」

洸雅の手の大刀^{だいたう}が2本に分かれ、1対の双剣^{そうけん}に変形する。俺は『卯^ウの花』^{ハナ}を開箱^{かいそう}し、背中に翼を生み出す。

「さて：争ってる場合でもないし、お先に失礼」

俺は翼で飛空して向かっていった村へと逃げる。洸雅の双剣^{そうけん}は俺の銀の翼の先^{むな}を虚しく掠めた。

「：逃げ足だけは速いな」

洸雅は持っていた双剣^{そうけん}を色箱^{しきそう}に戻し、赤い色箱^{しきそう}を取り出す。『赤の眷属色』^{けんぞくしよく}で最高の力を持つ『純色』^{じゅんしき}だ。

「『赤』^{アカ}：『装備』

色箱から現れた赤い髪の女が、洸雅を包むように気化する。俺には奴が何をするかが分かった。

「：大方ジェット噴射して飛んでくるだろーな」^{おおかた}

俺がそう呟いた瞬間、洸雅が足から炎を出して飛んでくる。予想大当たりだ。俺は銀の翼をはためかせ、時速120kmで飛ぶ。洸雅より速度が遅いなんて絶対嫌だ。

「：始めからコレを使えばよかったな、銀などに頼る必要が減っていたはずだ」

んだとコラ！？と言おうと思ったがやめた。

村についたが全く人気がない。市街地にも人影は全くなく、風の音だけが響く。

「…誰が見つかつたか？」

「いや、まだ俺と銀以外の生体反応はない」

俺達の前を、黄色みがかつた髪ミナエシの女しきそうが歩く。『黄の眷属色』の『女オ郎花』の色箱だ。

「誰もいないなら情報を聞く当てもないな」

俺がため息をつく、洗雅の口元が動く。

「…見つけた」

チャットルーム

—高麗コリョさんが入室しました—

—レンさんが入室しました—

レン) 【おや？新入りさんですか？】

高麗) 【はい、高麗コリョと言います。インターネットには不慣れですが、宜しく願いますね】

レン) 【いやいや、そんなに畏かしこまっちゃわなくていいよ？ここは憩いこいの場だからねww】

高麗) 【え、いやその…一応礼儀と言うものを心得ておこうと思ひまして…】

レン) 【…まあいいや。そう言えば最近中国の辺りで龍が現れる事件があつてるの知ってる？】

高麗) 【新聞映像で読みました。確かその龍、中国の小さな村をいくつも襲っているそうですね】

レン) 【最近の世界って不吉だよねー、高麗コリョも気をつけなよ？】

高麗) 【…あつたばかりの私を心配してくれるなんて…レンさんは

いい人ですね】

レン（【そんな事ないですよwwこう見えても魂使士たましじかいなんです♪】

高麗コリョ）【Σ本当ですか！？魂使士たましじかいってほとんど狂ってる人のイメー
ジがあるんですけど…】

レン（【…姉は狂ってますけどねww】

高麗コリョ）【あ、えと…ごめんなさい…】

レン（【まあ狂ってると思われるのは仕方ないよ、魂使士たましじかいになれる
のは『人外の者共』の血を引く者だけだからね】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2258y/>

色彩

2011年11月16日11時43分発行